

# さるしま junior

第4号（春一その4）

令和3年5月11日発行

園長 小菅 哲也

## 「幼稚園へ行きたくない！」はわがままなことではありません



風薫る5月。遊ぶのにも勉強するのにもとっても気持ちのいい季節です。ところが、ゴールデンウィーク明けのこの時期は、幼稚園や学校で、登園・登校しぶりや不登園・不登校が増える時期でもあります。

4月から始まった新しい生活。初めての学年や学校への戸惑い、新しい友達や担任への緊張、勉強や活動が一気に難しくなったこと、生活のリズムの変化、家族との関わる時間の減少、飛ばし過ぎや張り切り過ぎなど、1か月間がんばってきたことが、一気に心身の疲れとなって現れます。コロナ禍によるさまざまな規制がそれに追い打ちをかけます。

幼稚園や小中学校の子どもたちだけではなく私たちおとも、だれもが多かれ少なかれ、こうした不安や疲れを感じているに違いありません。「幼稚園へ行きたくない！」と発することは、決してわがままなことではないのです。



## 幼稚園や学校へ行けるのは「すごいこと」です

5年前、田戸小に勤務していた時のことです。朝の登校指導を終えて、学校へもどると



校門のところに人が集まっています。時折、近所に響き渡る大きな泣き声が聞こえてきます。その中心には、「学校に行きたくない！」と母親にしがみつくと、黄色い帽子をかぶった女の子がいました。母親もどうしてよいかわからず、困り果てています。

女の子が少し落ち着いたところで、「学校へ来てくれただけで合格だよ。よくがんばったね」と声をかけました。泣き声のトーンが下がりました。それ以上に、私には母親の安どの表情が強く心に残りました。

その日、女の子は、担任や相談員の先生と15分間過ごしたあと帰っていきました。翌日からは、本人に決めさせて少しずつ少



ずつ学校にいる時間を延ばしていきました。今は6年生となって、はつらつと学校生活を送ってくれているという話を聞くにつけ、当時のことがなつかしく思い出されます。

「幼稚園や学校に来ただけで85点。『楽しかった!』と帰ってくれば100点満点」と言われています。実は、幼稚園や学校へ登園・登校できることは、決して当たり前のことではなく、すごいことなのです。なぜなら、8割を超える子どもたちが、「幼稚園や学校へ行きたくない」と思ったことがあると言います。子どもたちも日々いろいろなこと悩んだり、つまずいたり、我慢したり、背伸びしたりしながら懸命に生きているのです。



## できないことではなく、「できること」に目をむけよう



わが子が小学校1年生の時の授業参観ではこんなことがありました。教室の前の廊下には、空き箱やプラスチックのトレイで作った船が誇らしげに並んでいます。どの作品にも作者ならではのアイデアがあり、色とりどりの夢が搭載されている感じです。そんな中に1隻だけ、ちょっと傾いた船があります。組み方や接着が不十分で、いまにも倒れそうです。

休み時間、わが子が私のもとに駆け寄ってきました。「父ちゃん、僕の船、どれだかわかる?」。私が答えるのを待つまでもなく、さっと例の船を指さしました。作品の“第一印象”は飲み込んで、「(船の土台) 作るの難しかっただろう。あきらめないでよくがんばったね」と声をかけると、得意げな笑顔を浮かべました。それからというもの、先生方の励ましもあって、物づくりが好きな子に成長していきました。

子どもたちのだれもが、その子ならではのよさや可能性を秘めています。ところが、ほかの子と比べられたり、目に見える結果のみで判断されたりすると、自信をなくし、窮地に追い込まれてしまいます。

目の前の子どもたちを、「特定のものさし」で測るのではなく、「昨日より上手になったこと」や「一生懸命がんばった姿」に視点をあてて見てみましょう。今まで気がつかなかった、新たな側面が見えてきます。それを認め、励ますことで、子どもたちは自信をもち、



心のエネルギーを充電させていきます。

本格的な教育活動が始まる5月。街のあちらこちらで見られる新芽のように、子どもたちのよさや可能性も芽吹き始めます。それを見逃すことなく、大切に育てていきたいと思えます。

\* 画像は、4・5月の子どもたちの活動の1コマです。